

しかしながら、多様性に向き合う時、自分自身は個を優先して考えているかと問われると、後回しにすることを当たり前と考えていることが多々あるように思う。そこで自分にとって必要となってくるのが「修正力」ではないかと考えている。自分の経験をもとに判断をしがちであることを自覚し、多様性に向き合ったとき、自分の経験や考えと同列に他者の経験や考えを並べ、必要に応じて修正する勇気を持ち、修正体験を積み重ねて行きたいと考えている。

今回、多様性に向き合う機会を頂戴したことをきっかけに、少しばかり書籍や記事を読む機会を得た。それらの中で、最も影響を受けた記事に、「多様性のあるチームは、事実をより重要視し、より注意深く処理し、より革新的である」という内容があった。同質である集団より、多様なメンバーの集団の方が事実認識力、修正能力が高く、客観的な見方ができるという複数の研究報告があるとその記事は書いている。紹介されている研究報告では、被験者200名の模擬裁判で、同人種のグループより多様な人種のグループの方が、提供された証拠について、事実関係の誤りがより少なく、誤りが発生した場合も修正する確率が高かったという実験報告や、模擬市場を設定して、金融リテラシーの高い参加者たちに株価をつけてもらったところ、民族的に多様なチームメンバーの方が株価を正確につける確率が高かったという結果がでていう。またスペイン企業4277社の研究開発チームを対象に性別の多様性のレベルについて統計モデルを用いて分析を行ったところ、より多くの女性を要する企業ほど、2年間の調査期間において革新的なイノベーションを市場に導入する確率が高かったことが報告されている。多様性を高めると個々人のバイアスが抑制され、思い込み疑問を呈しやすくなり、意見も述べやすくなることから、意思決定において、情報をより注意深く処理するからではないかと考察されている。

2019年4月より、尚絅学院大学は多様性に向き合うことになる。人文社会学群という多様な専門分野で構成される学群を有することとなるからだ。人文社会学群が尚絅学院大学125年余の歴史に、より革新的な教育をもたらすことを神は見守ってくださることと信じている。

参考文献

デイビッド・ロック、ハイディ・グラント「多様性があるチームほど聡明な3つの理由」『DIAMONDハーバード・ビジネス・レビュー』HBR.ORG 翻訳マネジメント記事、2017年1月30日、http://www.dhbr.net/articles/_/4668?page=2

分け隔てなく — 食の多様性 —

細 矢 理 奈 (健康栄養学科准教授)

はじめに

このたび、「多様性に向き合う」というテーマで教育と関連した原稿を書くように依頼を受けた。しかし、栄養学を専門とする筆者にとって「多様性(ダイバーシティ)」を一般的に論じることは困難であるため、今回は専門分野でもある「食」にスポットを当て、多様性と関連した思いについて書かせていただくことを了承願いたいと思う。

東京五輪2020を例にとり、見えてくる「食のダイバーシティ」の重要性

東京オリンピック・パラリンピック2020開催まで、約800日となった(2018年4月末時点)。前回の東京オリンピックは1964年であり、56年ぶりの夏季大会開催となる。1964年大会から見ると、社会状況は大きく変化し、それは食を巡る環境においても同様である。食生活や身体活動量の変化に伴う生活習慣病の増加、高齢化社会の進行で増える食形態対応商品の開発や配食サービス、種々の食物アレルギーにまつわる問題は、その代表的なものといえる。また、上記以外にも様々なライフスタイルや健康志向から生まれた「オーガニックフード(有機農産物・畜産物、およびそれらを原料とする食料品)」「ビーガン(絶対肉食主義:肉食主義者のうち、畜肉・鶏肉・魚介類などの肉類に加え、卵や乳・チーズ・ラードなど動物由来の食品を一切とらない人)」なども昨今認識されつつある食生活スタイルである。

筆者は以前、病床数473床の急性期病院で13年間管理栄養士として勤務していたが、疾患やアレルギー、治療薬と相互作用を持つ禁忌食品対応のほかに、宗教による禁忌食品の対応食も提供管理していた。例えば、イスラム教への食事配慮(いわゆるハラール食)は、その具体的な解釈や実践方法については国や地域などでも異なってくるが、豚肉・アルコールは成分としての使用を含め禁忌であり、また牛肉や鶏肉は条件付きであれば使用可能など「きまり」があった。宗教上の食事配慮が必要な患者情報が入ると、すぐさま病棟へ走り、予定入院日や入院スケジュールについて主治医と確認を重ね、その後自分の部署へ戻り調理現場とミスを防ぐ体制を作るとともに食材入手に走り回ったことを思い出すと懐かしい。

話は脱線したが、オリンピック・パラリンピックというものは、選手団だけではなく、各国よりメディア陣、選手家族、観客などが集まり、言い換えれば「小さな世界ができる」時である。2020年には日本という国の中に、小さな世界ができるのである。ということは、宗教上や食習慣上制限されている食への配慮、ビーガンなどへの対応は必須であり、東京オリンピック・パラリンピックでは、このような食の多様性に対する配慮について、現在組織委員会でも丁寧に議論されている。また、パラリンピックにおいては、前述の食事対応に加え、身体機能に応じた食環境づくりについても同委員会において、議論を重ねている。

東京オリンピック・パラリンピック2020大会では、「すべての人が自己ベストを目指し(全員が自己ベスト)」「ひとりひとりが互いを認め合い(多様性と調和)」「そして、未来につなげよう(未来への継承)」を基本コンセプトに掲げている。そして、その基本コンセプトを踏まえた「東京2020大会飲食提供にかかわる基本戦略」には、「日本食による「和のおもてなし」については、世界各国・地域から訪れる人々が、文化や宗教、習慣等の違いに起因するストレスをできるだけ感じずに過ごせる環境下においてこそ楽しめるものであることにも留意する必要がある。東京2020大会の飲食提供においては、人種、宗教、障がい等の違いを越えた多様性と調和についても十分に配慮するとともに、その取組内容についても発信していく。」¹⁾と記されている。

食のダイバーシティと本学での教育をつなげ、考えてみる

筆者は本学において、給食経営管理分野を担当しており、2年次後期より「給食経営管理のPDCAサイクル」に基づき、100人分の給食を生産する実習科目を担当している。生産された給食を学生たちと共に喫食するのであるが、実施年度により、食物アレルギーを有する学生、摂食機能により食形態や食事摂取時間に配慮が必要な学生が存在する場合があります、その都度対

応をしている。幸いにも、現在まで食物アレルギーに関しては、重症の学生はおらず、また学生も自身の疾患について正しく理解をしていたため、事前に予献立を確認し、代替食品について提案してもらう体制をとっている。また、生産管理を担当する栄養士役の学生たちとも情報を共有し、対応の必要性を理解してもらい、納得したうえで実習に挑む体制のもと実習を行っている。100人分の食事をおいしく、衛生的に生産することだけでも慣れない学生たちにとっては大変な作業である。その上、1人分の個人対応食が追加になるのはさらに難儀なことで、ミスをしないように皆必死になって命と直結する食事を生産し提供している。

その後、3年次には「臨地実習」で児童福祉施設や学校、事業所などで給食経営管理分野の学外実習を行うが、実際の給食施設では、学内の実習とは比較にならない数および種類の食物アレルギーや宗教上の配慮食を、1人もしくは少人数の調理スタッフが迅速かつ安全に作業を行っている姿を目の当たりにして学んでくる。そして気づくのである。管理栄養士になる前に具備すべき知識および技術が、自分たちにはまだまだたくさんあるということ。命を守る給食の在り方について、気づき、考え、学んだ学生たちは管理栄養士の卵として、ひとりの人間として、優しさと強さを携えて目覚ましい成長を遂げる。その成長する学生の姿勢から学ぶべきことも多く、感謝する場面に出逢うことが多い。それはまさに「管理栄養士としての自分」の原点に戻る感覚に近い。

病院勤務時代でも、食事の個別対応は減ることはなく、患者数および種類ともに日々増加の一方であった。おそらく本学での担当授業（給食経営管理実習）での食事対応も同様になっていくのだろうと筆者は考える。最近では、少しでも楽に事を運びたい、面倒くさいことはしたくないなどといった風潮なのか、授業において、自発的な行動、積極的な発言、コミュニケーションをとる場面を見ることが減ってきており、これらを改善するための方策を授業に取り入れ運営しなければならぬことが悲しいというのが正直な感想である。

その根底には、SNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）の浸透・拡大はじめ便利で快適な環境が当たり前となっていることもあるのではないかと考える。便利で快適過ぎる環境の影響で、身の回りの不便や不満足に対する耐性が低下している印象がある。また、人々とのコミュニケーションの大半をSNS上で済ます者も多く、その結果、人間関係に窮屈さを感じ、思い悩む学生も時々見受けられる。しかし、管理栄養士として社会に出るのであれば、他者を認め、食と栄養を通して、その人がより幸せになるために必要なことは何かについて常に念頭に置き、適切な行動を起こし続けなければならない。行動を起こすには、自分ひとりの力だけでは動かすことができない課題も多く、やはり周りとのコミュニケーション、調和が必要になる。だからこそ、4年間の大学生活は家族、学友、先輩、後輩、教職員、サークル、学外の人々など1人でも多くの人と直接的に関わり、ネットワークを広げてほしいと思う。

そして、学生を育てる立場である筆者は、様々な個性や背景を持つ学生たちに柔軟な心を持って、分け隔てなく向き合っていくことはもちろん、今回のテーマである多様性（ダイバーシティ）について機会あるごとに考えなければならないことが明確になった。自分に1つの重要課題を提示していただいた紀要編集委員会に対し感謝を述べ、この原稿を締めたいと思う。

参考資料

- 1) 東京大会2020 飲食提供にかかわる基本戦略、東京2020組織委員会、2018.3、<https://tokyo2020.org/jp/games/food/strategy/data/Basic-Strategy-JP.pdf>